金石文叢稿本

攝津一八

特別
チ10
4622
8

410
4622
8

攝津

京都帝國大學圖書

大阪安堂寺街淮油地藏佛背文

天平十一年安曇寺安置

大阪鷲昌詩沒萬卷中第五葉曰安堂寺街有淮油地藏在四達衢是為校屋橋條父老云是太古安曇寺之舊地石地藏乃寺中之物地藏背刻天平云：十字今磨滅考日本紀孝徳天皇大化五年己酉法師於安曇寺臥病天皇幸訪疾然則安堂地藏皆是老狸所遁

油掛街西岸寺中亦有淮油地藏然按城州伏見下油掛街西岸寺中亦有淮油地藏在炮火中二軒茶屋此間灰燼不遺一茅獨地藏祠東及玉造稱油懸地藏文久大火起於新町橋

黑川真道藏書
黑川寡前藏書

石川朝臣年足之墓志

武内宿祢命子宗我石川宿祢十世孫從三位行左大辨石川石足朝臣長子御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣當平成宮御宇天皇之世天平寶字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳春秋七十有五薨于京宅以十二月乙巳朔壬申葬于摂津國島上郡白髮鄕酒垂山墓礼也儀形百代冠蓋千年夜臺荒窣松柏含□嗚呼哀哉

石川年足傳

石川年足、大紫蘇我連子曾孫也、祖安麻呂少納言小華下、父石足有文藻（文藻據懷風藻）和銅養老間、歷河內守左大辨右宰大貳、天平元年權為參議、至從三位、年足性廉勤、每讀昏景習於治體、起家補少判官、頻歷外任、天平中叙從五位下、為出雲守、在官數年、百姓安之、帝嘉之、賜絁布及正稅三萬束、為東海道巡察使、遷陸奥守、進正五位上、除春宮員外亮、兼左中辨、進從四位下、為春宮大夫、先是詔諸国造金光明寺法華寺、而主者怠

慢久而不成至是分遣年足及從五位下阿部小島布
勢宅主等撿察勝寶元年進從四位上以式部卿兼紫
微大弼拜參議是歲宇佐大神憑語欲至京師事聞年
足與藤原魚名等為迎神使踰月奉神輿入京師五年
叙從三位為太宰帥寶字元年改神祇伯兼兵部卿任
中納言進正三位兼文部卿賜勳十二等奉勅與惠美
仲麻呂等改易官號勅各上意見年足上封支曰臣聞
治官之本固擾律令為政之要應須格式方今科條之
禁雖看簡牘別式之法未有制作伏乞作別式與律令
並行遂作別式二十卷其條目各繫本司雖書未施行

而時頗雜用其法尋為御史大夫以遷都賜稻四萬束
六年薨年七十五遣摂津大夫佐伯今毛人信部大輔
大伴家持弔賻（續日本紀）子名足

旅路之打聞　清水濱臣著零本

石川年足朝臣墓誌

石川年足朝臣の墓誌は金牌あり出しハ三月十五日の夏なり、（文政五年三月歟）
却れ難波ふ有しかぐらもしぶ難波ふく誰知まてものも無の
ゆ死せ七日京へ帰りけるぐらく誰知まてものの考ふのうの長
一月を経て四月廿七日高尾山ふ埋ぐ一日澈詮がとゝ来一ふ
なりあ勇ぐらう家れ果必ゆ清紙ふ此墓誌乃文を記て文
中ゆ出ぐ故ふ事をとぐらう出ぐ故のれゝ思ふ所もとはを
ぐ一日二日の内又ゝ記来ゆ侍A云置て帰り勇さく高
尾ゆりゝ先ゝ見ゆ見たしゝ明日ハとく詮

がなしみにひかれて其金牌をも見又つく〳〵無化妻し此事をも
問ひきらんと明くるを待ちに待て久しくありし人ことはなく暇なし
日をくらしゝ男廿九日夕まぐれに傳を得て詮なしと思ひ先金牌
の事をもてみる詮委しく語りきこえける摂津国島上郡白髪（マカミ）
郷　白髪をまかみとも訓せし考を別に委しく志るせり　ことにふる阿久刀神社の北に當りおつふ
あくた川といふ有名の川を渡りて廿丁ばかり遡れば古曽部とてく
能因法師が住しあくたあたりそのあたりに光徳寺といふ寺有りけるや
がて光徳村といふ村長田中六右衛門を幾代をかさね重ねてすむ
に住むものなり六右衛門が垣内にいささかの丘（ヲカ）山有りて岡の北を
に一木の松生たりいにしへの世にしもが云をもしらず知らで荒神森と

呼来せり其岡のもと五百坪ばかり野らとなりて有に松の下五尺
四方のところ昔より絶て草生ることも無しことに今年正月元日
清く家くが都も鄙もおしなべて祝ひごとなしてもちひの調
じまうけ居ることは勿論居て食ふなり六右衛門が弟吉兵
衛といふが兄に向ひていふよう年の始に言忌も志あらざなる事
聞ゆるをいかにあるべきかと思ふに夢に見へしをさるもなし居けるがおのと
ある夜半聞ゆる物のれをきくつ日きのふ二夜続きていと
清く夢見侍り其夢を我家のうしろの岡崩れて荒神森
倒れ家を押倒されると見き二夜まで同じ夢見しは必定
さとし有る事ならんといふに六右衛門も心ある男なりければその年

頃おひひらくりゝ所々此岡のもと五百坪も有所おをいをげく糸
野らやぶとなり一置ん事益なき支那りんりゝぐ此岡崩し平
らゝ草原刈拂ひく畑ともうち苑ともなりくゝ小林橋の土
ふあ屋る所られば林橋の林とるる所やさらぐ歳毎ふいくそんく
の價をそ屋と思ふる後ぎみ無く有しふ弟がかくいふを
そ紀折でと思ひく呂れ志ふ思ふるり三日をも過さば諸ともあ
堀ふひ〳〵者ま其心支度せと云合せく有ぬ三日の日あり
ぬ隣ふ住々る某通称を忘れとうそいふ賊の男年ゆるる乃
ちゝ如おく来りしそ屋ふ聞ゆ事を屋りとんへ出まり
ま屋る所ふ居る屋し何事ぞと問ふ某近く居るくいる聞え

苦一〳〵うち屋家ふ物を者ちる事に侍れどそうふあそもし年
の暮小人をそふ物を屋ちる紀ぐ〳〵と人知ず埋み隠され一事は
侍らぬやあれの如く軒を雙屋ふるうやしのゝふむ門みうそ
きばいるるん事し隠し給ふ屋紀ふあるすそ〳〵さも却ちま
隔るく語り聞を玉を以ふる一思ひもゝ者ふ変ぬれいたそ〳〵
あ紀を居ゝるる和ぬ〳〵ゝゝ紀ば言いふ人ふあ〳〵ず何支を見聞
く斯ゝいふそ如つふ思ひゝ〳〵ふ事也とんふ押返一〳〵いるあり
ぐひ玉ふ那一たるふ埋み玉屋る所を知り侍りとゝふあるし
弥不審ゝそは筑ぐゝそゝ〳〵ま荒神会のりゝゝゝ云あるし更ふ
知らぬ変るりいゝるれば然いふそゝいふ某云やう却れきふり

つゝ多く起出る年の隔のあゝ垣ゆひたゝ法そんとさゝ[illegible]
まれば荒神社のもとゆいたる草生の所新しきを掘返しまゝ
見るに土うるおひて年の暮るは誰も殊更足ぬちゝひまてあれば
いとうれさに押あらぬるは有間敷事なれど心なう
外にもしたるもあるを人知るまで埋やゝし給
ひしと知る人は隔無き中なれし後安からず思ひ給らるる斯ハ
きたなきなりとあるしひがゝし犯事なれ何事もいそしいき
徒く見んとて松のもとに至り観るに誠に新しき土を掘返し
たる物を埋めたるに湿ひるおびたゝしはじ驚きて弟のゆゑ
なる利を語りていふまれ堀見るやいなや二人ともうつ

四尺ばかり下に硬くいと堅し土を掘出しつゝ見るまに下を炭にて
ぬりたる埋めたるに又穿たれ炭なり一尺もなり出るにんぬ
思ふに朱なり一尺一二寸ばかりなる角なるもの
有り其ゝを堀崩しなる中に白骨乃薄らぬるる有り
六右衛門も夢がゝりを思合せて何と無く物扨なる[illegible]
しなるの法なれ法ひ埋めるに某も疑を晴されぬ
後ひ[illegible]言葉なるに口ゝ[illegible]
既り斯ゝ人ハ語らぬ有りし六右衛門が弟の法師
なるに都東寺の近隣六孫王をいたゝ奉る寺の内に多門院
なるに住あゝ年の始ハ兄のもとゝ訪行くを今年

を何れと事無き様に成り、三月の十日ごろに行ふとて、萬の支
度らふ様なりけり、六右衛門も弟の事なり、殊に法師の身なれ
ば、さむ〻繁事多くあるべしと思ひ、志ある事なんあるべき
を佛に仕ふる身なり、彼松の下に行て阿弥陀仏唱へ奉るべし
と云ふ、多門院なり、云様待玉へ、そは聞置く事あり、
三十年あまりの昔、此村に行者の住しが、小島を好み
て多くを求めたまふ、樂しきを悪き、狐有りと物に取り、
行者腹さいなむ、食を免の様ひごとしなり、狐は弱ひ者なり、
うく〻日々に痩衰へ、遂に此岡を枕として死ぬ、故六
右衛門殿これを見たまふ、人知れず毋刀自と二人にて

此岡のもとに埋め、われ其夜なり、毋刀自物の音に煩らひ
てあり、あまた口走りたる年久しく、吾が如く領し居る所に、
なれそなれ、そなれ物をば埋めたまふと、堀出し清めずば、い
ま一度目見せ給へ、か〻と云罵れるにの祟といふ事は
知る人あり、多くは只あれも居るばかりなり、故六右衛門殿なり、其心
を知り得られしかば、その夜の夢に、狐のなれらを堀
出す、外に埋められしかば、自ら出でぬ、押拭ひて様に心地せり
ら、ぬぐはるるとて、おのれ稚き耳に聞覚居たり、かくあるべしとの松の
元とも貴き人のわたらせたまふ所なりしかば、其傍に打捨置んと事さ
いたくたのもしよりあらんと為んとて有りしかば、いとくも人知れず

往く見んとて共に行く見るに[illegible]堀
返し見るに三尺ばかりを堀らぬに墓誌の金牌をとりて
[illegible]の賤男なりけれども心附きし
羽[illegible]多門院打返し見るに土に塗れたるを洗ひ清めたれば
黄金(コガネ)の色なりけるに文字顯はし出たり多門院これを吉の人
の墓誌なりとて其堀し所をはかるの傍に埋め置きし金牌
を仕寺に持ち帰り多門院を歌を詠む法師に西六條の門主
に仕へまつる識詮に物学むれば持行き見せ給へ
詮見るに大に驚きこれは貴く珍しき物なり門主に見せ奉れ
とおぼしめし預りよとて門主にも見せ奉り多門主も珍しき物なり

愛させ玉ひて詮に返し給ひなり詮は[illegible]
墓誌と云物を後世に至りて[illegible]
折に堀返さるるこんを[illegible]
く堀も出さるべきにあらず納めしめんの為の物なり[illegible]
今の墓誌もそれの埋めさるべきにあらずやと
其石碑[illegible]日本紀に見えたる此朝臣の傳をそれぞれ
[illegible]石の[illegible]堀出[illegible]
[illegible]其由多門院にも語りて墓誌を[illegible]
多門院[illegible]預りを置き掛る程に[illegible]御[illegible]
[illegible]聞玉ひて一目見るやうにとのまはし

あくあらそふを見て奉る又古物あむ物のごとちハ多門院の
そしゆ或くも見るおそ都ぐみはやりて隠れなく成ぬ
おのれ志二人三人伴ひ中或くいたるもむ志打ち勢抑此
石川年足朝臣を平城のくもゐつゝ奉りたくみ三
位式部卿きく天平昇り天平五年に身罷られ事続紀
廿四の巻ふ委しく傳有く金牌とあて勢見るみ違ふ支無
志ろきもの作意見別式廿巻を有く却而爲爭のまつりおよ
いさとおもはしし朝臣より又萬葉十九の巻ふ天ふ波毋五百
都綱波布萬代ふ国所知年等五百都奈波布と云歌見えく
り父の石足朝臣も懐風藻に五言春苑應詔詩一首を載勢

理張くより近き世に大和河内摂津などより古き墓誌なれ
やれ堀出る志あれとおく昔ふちゝく位高き人のおがねを多
作きゝ古戈有ふ文字のうきさ爲多作くゝ志ふ所とり具し
くゝ志あくさつゝ刑いくゝやおく珍し紀物堀出くる折しを
都ふ登り あいくゝ志ふ其物を見一事のおもしくも嬉
敷も貴くも珍らしくも覚えくゝ志ふ旅路の裏ふはふれふ
ま志ろ物あもしと人ふもおもり思ふ墓誌乃文は委しく
おとはおとものふ訳めれハくゝふは有きくゝ只其堀出を爲
ゆ歩くゝのくゝを書き使ふ事ぬるふ面白く

抱持寺鐘銘

粤若祖父越前守藤原朝臣帰心於普門妙智傾首於无礙大悲而墜露溘然冈電倏尒納言尊考軾先業之不遂歎善因之未成多以黄金附入唐使御并買得白檀香木造此可千手観世音菩薩像一躰仍建衛場於摂津国嶋下郡安置此像号曰抱持寺於是弟二男備前権介公利鑄豊鐘一口于時延喜十二年夏四月八日為銘曰 已上略記

金大鑪冶施仕師工鴻鐘協律鳧乳應梵聲徹霄漢響、晩風感動随聽懺悔生夢儆告諸佛唱導大衆

雖遠必達无幽不通悲想慈下阿鼻獄中長夜知曉
妄有帰空觀音依頒先公善功俱満三界拔出焚篭

四天王寺西面華表額銘

釋迦如来轉法輪所當極樂土東門中心

浪華之賑（二篇第十八葉）ニ曰ク右ハ皇太子ノ真跡トイヒ或ハ小野道風ノ筆トモ云又ハ弘法大師ノ筆ナドイヘリ是ハイヅレモ誤ニシテ此額ハ三井長吏慶還ガ弟子慶耀勅ヲ奉リテ書スル所ナリ委クハ近日予カ著ス摂津名所圖會大成ニ出セハ此ニ略ス

摂津四天王寺丁未之乱厩戸皇子誓願四天王以建之故名寺在荒陵郷故又號荒陵寺（聖徳太子傳暦伊呂波字類抄）聖武帝天平三年施五十戸（新抄格勅符）六年賜食封二百戸限三歳（続日本紀）孝謙帝天平勝寶四年施二百五十戸（新抄格勅符）称徳帝神護景雲元年以和銅中収播磨飾磨郡寺田二百五十五町（五十五町據日本紀略）為百姓口分至是捨大和山背諸国乗田没官田償之三年施周防封五十戸桓武帝延暦五年遷寺田於播磨印南郡（続日本紀）十二年播磨言故左大臣藤原朝臣

永手位田若干町、神護景雲三年、勅入四天王寺、夫位田以身為限、永入寺家、支乖国憲、勅先朝施行、不必収還、類聚国史、

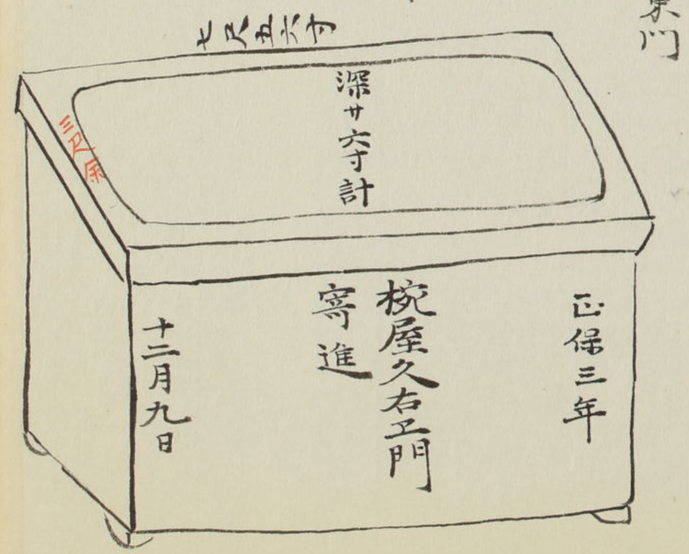
極樂寺石燈篭文

建武三年三月楠正成建

大阪警昌詩後篇巻下第八 住吉條冠註曰、遠里小野村極樂寺然毘沙門有古石燈刻曰建武云、其餘磨滅、不能辨一字矣、

羇旅漫録巻四

椀久が奉納の手水鉢を大坂東門跡掛所昏院の庭ふあり所縁あらざる者を見ばゝ大坂の人も知らざる者多うしかも去年杏花園始めて見出さる是よりしゐて人これを知り始今昏院普請最中也庭荒きく手水鉢草中ふあり則



これを摺るに石面あらく石もれて墨はらず文字ぬけ落ちあり
尤恨むべし　臺石も石面磨らず上の手水鉢と臺ハ取離し
ふるちり下の足も常の石を敷くふ除くを直せ　物なり

五葉松
高サ二丈計九サ
一尺計枝振十本
右如図左右ニ分レテ見エ
大坂八丁目寺町実相寺本堂片側ニアリ

椀久が家を京橋（一説ハ大手筋ハ在りと云ふ）今甚跡詳ならず泉屋西柳
の詰ニ　椀久が墓を大坂八丁目実相寺本堂東南の隅ハ
あり（墓誌）宗達之墓（如此）延宝年中ハ没　少墓の側ハ松あ
りとふ予此度を大坂出立の朝訪ふ故ハ実相寺ハ尋往
てらに　未だ見ることを得ず尤恨とも（椀久もと伊勢の人なり彼地ハも椀久が墓
ありと
いふ）

摂州嶋上郡古曽部村能因法師碑

羅山子

能因法師者左大臣橘諸兄公十代之孫也本名永愷父曰肥後守元愷永愷補文章生號肥後進士後遁世改名能因號古曽部入道善和歌此道昔無師弟至能因初以長能為師果然否嘗有炑風白河関之詞世以為美談兵部大輔大江公資五條東洞院宅庭有大櫻樹毎年能因自古曽部入洛往玩其花花亦依人而其名弥顯後冷泉院永承四年禁裏歌合時能因献和歌有三室山楓竜田川錦之句不亦

栄乎其餘詠歌繁多不可枚挙也摂州高槻城邊有
其舊跡今略書其姓名以傳于後世云
慶安三年春三月　日

向守大江姓永井氏直清置

後拾遺

[illegible]

同

[illegible]

新古今

[illegible]

摂津州島上郡冨田荘祥雲山慶瑞禅寺開
山特賜大宗正統禅師戯谿大和尚御葬塔
銘

住佛國禅師支那高泉熏沐拜撰

師姓奥村氏京兆人生而多病父母常禱佛始五
歳忽病殂父母痛哭適有僧至其家詢其所以乃
腰下灼艾少焉而蘇父母喜問其名字住止僧不
荅去自是益信三寶尊八歳入東寺習密教師之
父見師氣宇超邁謂之曰子乃宗門人胡淹滯
乎此師即入摂州之普門寺時年十六剃度納戒

留意禪学越二年遊方飡風臥雪凡十五年遠讀
雪竇語録極力叅究者又六年乃得慶快因謂衆
曰我向来曾知道不在文字上今日始知亦不離
文字慶安四年朝廷賜紫住妙心寺承應三年再
住嘗述川老金剛頌評虛堂語録事蒙師恒欲踰
海入唐尋師印可惜國有禁莫果所懷乙未歲隱
元和尚應化肥州遠有僧至師問和尚有何言句
僧荅近有偈云挑雲入市無人買惱殺杖藜歸去
来師聞得欣然與衆僉議請普門一見如夙契丁
酉夏法皇召師入内殿問法奏對称旨賜顔大悅
賜頌德山入門便棒之歌戊戌九月大將軍捨五
畿勝地給僧糧師輔祖開新黄檗甲辰正月師應
江州正明寺請四月法皇召師說法賜旃檀香十
斤黄金絹帛等又勅賜寺額乙巳十月藤大妃請
師陞座說法是月法皇賜播枝山御園以為禪苑
御書天壽山資福寺二大額十一月奉旨為光子
内親王宣戒法賜佛舍利塔旃檀觀音像初祖像
御牙御杖等明年三月師進天壽法皇遣忠康平
公賜御香白絹画屏等新院上皇亦錫香幣十一
月法皇問心經要義乃撰心經口譚一卷戊申四

月詔入大内親受菩薩大戒一日法皇咨詢禪要
師奉柏樹子公案上頌除知解洞徹根源錫以大
宗正統禪師之號勅改所著請益録為宗統録賜
刊放流通併親御宸翰其略云令人成不見之見
得未聞之聞至其以機奪機以毒攻毒何止削圓
方竹杖鞭卻紫茸氈直得鉗鎚古今烹煅佛祖朕
纖毫頓断大活現成須弥不高洋海不廣覚圓裹
三世光通徹大方始知古佛心宗大而無外師實
得其正統者也又賜謝法乳之宸翰寛文十年四
月師領衆就正明坐夏蒙上慰問夏満謝恩旋省

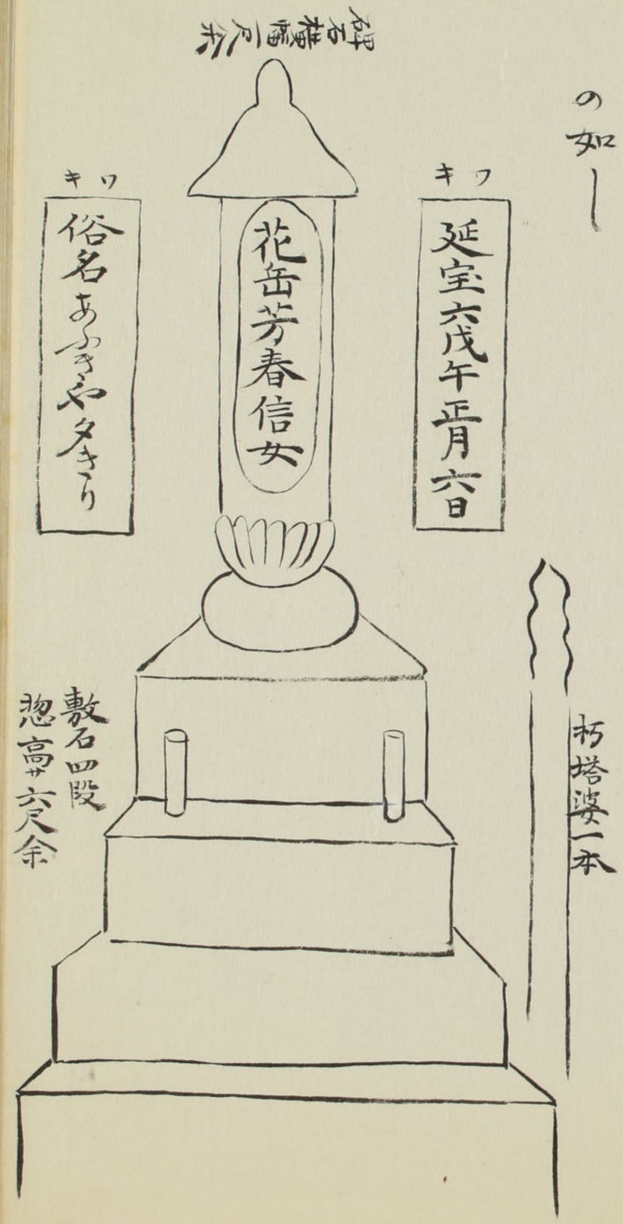
黄檗老和尚信宿而去八月十五日赴大坂諸檀
護請寓弟子拙道九島院先一日示衆曰六根渉
境那言滅心不随縁豈謂生踏轉涅槃真正道帰
程唱水調歌行廿二日應有司齊是夜合府官從
請師開示法要師高声
遣使礼謝忽暴雨驟至山海震動旋飆刮地巨浪
翻天諸從者促師迯避師曰生死数矣其可迯乎
汝等端心正念可也弟子等見勢陰掣師起座師
厲声責之曰生死之際當持正念胡顛倒乃爾如
是者三乃索筆書偈曰三十年前恨未消兇回受

屋爛藤條今晨怒氣向人嗔喝一喝卻倒胥江八
月潮書已祕諸篋中俄浪漲屋裂一時湮没師獨
趺坐水中夷然不動項門如炙顏色如生四方緇
白悵惶竟至見師端坐疑其無恙即而視之已蛻
矣乃當空羅拜舉声大哭如失怙恃實庫戌八月
廿三日也即日迎帰閣維于祥雲山闍至法皇為
之嗟惜減御膳者数日特賜祭於内殿嘗出内府
金為師造窣塔者三城州黄檗江州正明摂州慶
瑞覆以堂宇示尊厳也旦勅毎歳諱日必就正明
修法支嘗造師肖像入官供養然後始奉于塔上

又賜経蔵以鎮之自此以下疑犹有文章今從原本

羈旅漫録卷四

七月晦日大坂下寺町浄国寺へタきりゞ墓と見て奈ゝ図左の如し



此墓浄国寺本堂のうしろ東脇西向ふあり

元禄五年ノ秋ニテゾ侍リシ楠正成ハ忠義始終専ニシテ王室ニ死シタル人ナガラ墓表ノアラザルヲ西山公念ナキ事ニオボシテノ佐々介三郎宗淳ヲ摂津国湊川ニツカハサレ碑ヲタテ田地ヲ其近辺ニ求メテ廣厳寺ニ寄附セラレ永冥福ヲ修シ侍ルベキヨシ命シ玉ヒヌ其碑面ノ八字ハウスキ命ニ御身ヅカラ筆ヲ染テツカハサレケリ

嗚呼忠臣楠子之墓

碑陰ニハ曾ヲ舜水先生ノクヾシ正成画像ノ讃辞ヲ刻マレタリ

忠孝著乎天下。日月蔑乎天。天地無日月則晦蒙否塞。人心廢忠孝則乱賊相尋。乾坤反覆。余聞楠公諱正成者。忠勇節烈。国士無雙。蒐其行支。不可槩見。大抵公之用兵。審強弱之勢於幾先。決成敗之機於呼吸。知人善任。體士推誠。是以謀無不中。而戦無不剋。誓心天地。金石不渝。不為利回。不為害怵。故能與復王室。還於舊都。諺曰。前門拒狼。後門進虎。廟謨不臧。元兇接踵。構殺国儲。傾移鍾簴。功垂成而震主。策雖善而弗庸。自古未有元帥妬前。庸臣專斷而大将能

立功於外者。卒之以身許国。之死靡他。觀其臨終訓子。從容就義。託孤寄命。言不及私。自非精忠貫日。能如是整而暇乎。父子兄弟世篤忠貞。節孝萃於一門。盛矣哉。至今王公大人以及里巷之士。交口而誦說之不衰。其必有大過人者。惜乎載筆之者無所考信。不能発揚其盛美大德耳。

右故河摂泉三州守贈正三位近衛中将楠公賛

明微士舜水朱之瑜字魯璵之所撰勒代碑文。以垂不朽。

後ノ二行ハ西山公ノ御筆ナリ云〻

楠公墓記

貝原篤信

天地之間唯有一氣別之則陽與陰而已矣人之生也雖俱稟二氣有受陽之多者有受陰之多者故其爲性也有屬陽者有屬陰者凡屬陽者其氣必清明清明則易知屬陰者其氣必昏濁昏濁則難測自然之理也故聖人之作易也雖陰陽不可不兩立然以有清濁之別淑慝之分遂以陽爲君子陰爲小人嘗推此理以試觀天下之人凡其爲人也剛明正直疎通洒落如青天白日無毫末可疑者必君子也是屬陽之人稟清明之氣者也其爲人也柔暗掩藏隱伏

狡獪如陰曀埃霧難測知者必小人也是屬陰之人
稟昏濁之氣者也於是又嘗從古人之中求陽剛清
明之君子則於漢得諸葛武侯於唐得顏文忠公於
宋得范文正公司馬溫公與文丞相求之本邦則如
楠公正成其人也蓋公者本朝之忠良而振古之豪
傑也吾邦歷代名士出乎其右者蓋罕見其比其忠
義勇智校之異域之英俊恐可無恥也如夫愛君憂
世之心足以動天地感鬼神貫人心耀古今聞公之
風者百世之下莫不感激而仰慕非公之忠誠豈能
如此乎可謂眞大文夫也彼兄弟父子蹉跎戰死而

美志不遂良可痛惜可謂有子有弟也其履歷戰功
載在傳記今不暇枚舉惜乎舉世唯知其爲良將而
未知其爲賢哲也今茲暮春余發自京師將歸于故
里偶阻西風泊舟於攝津州兵庫攝衣下船陸行到
湊川北而見公之墓墓在平田之中榛莽蕪穢無埏
隧無墳封又無碑碣塋上唯有松梅二株悲風蕭蕭
春草青青余歔欷良久祇回不能去忽謂今無碑石
如此恐後世或不認爲公之墓故以爲田松梅摧
爲薪亦未可知也於是託兵庫館人繪屋氏欲建小
石碑於其塋上頗爲營計而去焉余歸鄉自顧念公

得疑待之偉烈洪名不得區區之揄揚而明矣若今欲稱述
彼德業勒之石碑非老于文學者則不能也且吾儕
微賤而立石碑於他邦恐不能逃僭率之罪終改悔
而廢其事且送書於兵庫館人令輟彫刻然感歎之
餘不能默止私記其所懷云爾自娛集

寄攝津兵庫嚴寺千巖師書　　常山源義公

久聞喝雷轟耳惟憾未遂披雲明河之望耿耿依依
嚮修楠子之荒墳就請題碑面予冠以嗚呼二字蓋
倣延陵季子之例當耶不當恐後人之嘲憐懼不少
非師了了誰肉千歲之枯骨乎曷勝感激之至邂逅
何日渴塵萬斛不宣常山文集

碑記

楠公之墓在攝津兵庫湊川之傍即其戰亡處也元祿壬申之秋常藩源義公聞其無墓表特遣儒臣佐佐宗淳新建一隆碑乃脩墓埋石棺中藏一圓鏡徑一尺二寸其背刻曰楠正成靈塚上爲二層石座設龜趺碑巍然其上高凡一丈二尺八分大書曰嗚呼忠臣楠子之墓即義公親筆蓋倣孔子題季札墓曰嗚呼有吳延陵君子之墓也碑陰勒明徵士朱舜水嘗爲加賀菅公所撰贊詞以代銘焉爲買田其側附廣嚴寺永供香火寺在墓之上方奉楠公靈牌并藏

義公所賜手書云

貝原益軒の軼事

先生京師へ上りし時の事陸奥にてもぐ横笛を遊ぶ一折し田
ゐる且一孫丸の如き小家に所あるを聴ねて伺ふに伶人横笛を付新曲を遊ぶ所を
聞て美しく面白く覚えたりと云ふ碑を作人横笛を付新曲を遊ぶ所を
をこそ且覚へ一所にてもぐ人々の面白く思ふ所を聞き
耕しやすぐと伝ふる先生此事を聞て世人に云ふ
恐ふるる古人の法なく芸名を史に垂れ成名を残すものも多
究竟の不人やく荊棘に没し一片石の彫まるるばいろんでやうくも
後来の者知らざる牧竪樵夫の為に此所いのぐるべ
驚歎理なる者へ此事を写まるふいろく思へ恐くふ

自

行石碑に年代を記すことあらざるは世人の不審とする所なり諸碑に記すること
勿れ又牧野四郎の唐突なるも免れんと思ひ先生無辜の南豊
事件を記すを拒む（事件を先生の家に於て強要せられ大坂四郎事件）国用きくべきなり山崎先生宅を訪ふ
藤中井事苦労絶り淀川に於て入水せんとす吸び
それぞれ入獄終りて云ふも詳なる事なるもの式部代数代此所
小住所年表其古をば鄙人に相の氏や相変り星移りて
の埋もれ人くなり紀事を筆録事苦労 鄙人を数代此所
ふく先生宅の門に掛り於ておく多の家着を安穏に移転
之は先生此家の内部高き付力持をいづれ長くしし沼の蛍城先生
此家ふく移るる影人くまく望む所なり先生京師に赴くなり

碑文を作り文は内侍使の碑文を作り
立石の中迷ふ如く中さんくく
碑文を作り紀の如く内侍使に主人を拝り
碑式多数は碑式に別に多し先生の書
まりそれぞれ人不知碑式此中に
あらで先生の言葉なし 海文は返ぜし
人不審なり或は改竄し
られを待つ人程なく世に
をもく一世は思ひ出に多年
年表補註精出の古に一四号 日有先を事ふ

[illegible]

今年を[illegible]不覺拭涙を流きりつゝ[illegible]

[illegible]先生の[illegible]

[illegible]義公[illegible]碑面[illegible]嗚呼忠

臣楠子之墓と云ハ字も謙[illegible]

[illegible]碑[illegible]

[illegible]

墓[illegible]

[illegible]

碑文[illegible]

[illegible]

[illegible]楠[illegible]

[illegible]義公[illegible]石の[illegible]

[illegible]先生[illegible]

[illegible]

南朝太平記巻一　九才

南木氏石碑之銘

楠河内判官正成ハ智勇古今ニ秀デ概ニ臨ミ変ニ應シテ城ヲ守リ謀ヲ帷幕ノ内ニ廻ラシテ勝コトヲ千里ガ外ニ決ス一世ノ奇策謀略勝テ云ベカラズ後醍醐帝ニ一度頼マレ奉リテ忠臣ノ美名ヲ揚グ惜カナ足利尊氏卿西海ノ波ニ数万ノ兵船ヲ浮ベ摂州兵庫ニ着岸ノ日聖運ノ開カルマジキヲ知テ終ニ被地ニ自殺セラル今ニ至テ天下ノ人樵夫牧童マデモ其忠貞ヲ感シ其神策ヲ美談セリ去レバ近世元禄四辛未年貴君楠氏ノ徳ヲ

彼

感ジ思ヒ召レ其旧跡ハ末代ニ至リナバ廃レンコトヲ嘆カセラレ、矢庫民家ノ逃レ正成ノ墳墓ヲ再興遊バサレ、碑石ヲ建サセ玉フ、土壇ハ当国御影石ヲ以テ高サ五尺方五尺四面ニナンサレ中段トモニ御影石ニテ高サ二尺方五尺四寸ナリ其上ニ洛東白河石ヲ以テ長サ三尺幅二尺高サ六寸ノ亀形アリ其上ニ居ル所ノ石塔ハ和泉石ヲ以テ高サ三尺八寸横一尺六寸腹一尺五寸ナリ土壇ノ下ニハ石棺ヲ埋セラレ棺中ニハ亘一尺二寸ノ圓鏡ヲ納メサセ玉フ其鏡ノ裏ノ銘ニ楠正成霊源光国造立トアリ碑石ノ表ニハ嗚呼忠臣楠子之墓ト刻セラレ裏ニ碑ノ銘アリ其文ニ曰ク

忠孝著乎天下云々

今既ニ三百餘年ノ星霜ヲ経ルトイヘモ貴君南木氏ノ智仁勇ノ三徳ヲ褒シ其忠戦義死ヲ感ジサセ玉ヒ末代ノ侍士ヲシテ忠勇ノ道ヲ勧メサセ玉フ豈ニ其徳大イナラザランヤ

明治十六年八月廿四日夜録了 禁出入 誠

長崎行役日記（六十八ウ 明和四年十月廿日ノ條）　長久保赤水

廿日未明ヨリ淀川を過ぐ　凡て此邊の河を常とする水なり
雨ある時は俄に来る見えず　両方の堤高し　中を砂
流れ積りて川高くなり　平地より
八坂を登りて　川をわたる　楠公の碑を大道より北二町
その理畠の中に在り　我藩の先君義公の立てたまふなり
碑を圓首亀趺二重垣　碑陰の文を大明の徵士宋
舜水の撰なり　四五間四方の室を造り　風雨を覆ふ瓦
葺あり　前後格子　左右壁なり　前に石燈あり　高さ一
丈ばかり　宝暦中尼寿慶の寄進なり　是より五十丁北
の山陰に楠寺あり　醫王山廣嚴禪寺なり　後醍醐帝
の時　元僧俊明極を住せしめたまふ所なり　楠公の

像真筆の帖軍配團等ありといふ此處も摂州矢田部郡
坂本村ちかく折節殘月畫の如くなれ共室中暗く碑の
形も朧ろ〳〵なり

假名世説卷上 廿七丁

太田南畝

貞享二年神無月播州淀河梅西成が墳墓小木
〻自害したる者なり其辭世
重義名將戰死所至今一塚堆淀川誰知霜刃默然意
梅霜垂淚松但烟
[illegible]
松者儀遠國者なれ共屋敷先年故郷を離れ久しく絶る
の後故郷の菩提の事は僧を雇寺堂建立仕
何の〻深も無〻何の面目無〻者〻なれ共今如此家
子等も無所詮踏〻奉行所へ仕者なりそれ

法華経を書写し奉り金字金泥仏部の仏を
貞享二乙丑年十月六日　橘成信
廣瀬寺和尚

明治十九年六月廿日

隨意録卷三　十丁

家田大峰

開之水戸西山公建楠正成之碑於湊川自題之曰
嗚呼忠臣楠子之墓宋史云昔孔子題吳季札之碑
曰嗚呼有吳延陵季子之墓歲久湮沒宋朱顏復取
孔子所書十字刻碑又唐玄宗書張説碑額曰嗚呼
積善之墓蓋皆倣乎季札之碑爾

謁楠河州墳有作　　賴山陽

東海大魚奮鬣尾、蹴起黑波汙黼扆、隱島風雲重慘毒、六十餘州總鬼魅、誰將隻手排妖氛、身當百萬嗟闕羣、揮戈擬回虞淵日、執劒同斷即墨雲、関西自有男子在、東向寧為降將軍、旋乾轉坤荅偖遇、洒掃輦道迎銮輅、論功雖陽彙有力、謾稱李郭安天步、出將入相位未班、前狼後虎支復艱、献策帝閽不得達、決志軍務豈生還、旦餘兒輩繼微志、全家血肉殲王旻、非有南柯存舊根、偏吸北闕向何地、摂山逶迤海水碧、吾未下馬矢庫驛、想見訣兒呼弟未、戰此刀折矢

益臣妻畢北向再拜天日陰七生人間滅此賊碧血
痕化五百歲茫茫春華長大麥君不見君臣相圖骨
肉相吞九葉千三世何所存何如忠臣孝子萃一門
萬世之下一片石留無數英雄之淚痕

明治十八年十月一日写

義

書楠公碑本後　　賴山陽

嗚呼忠臣楠子墓五百年後見七字想見當時拔劍
目裂眦黑風吹血羅天地厉鬼果能鑒此賊天定論
定誰异議朝廷闕旌典藩服表死儀況鐫著客文未
知忠寃慰唯有題中署賜銜近衛中將正三位猶係
延元天子賜

書朱舜水楠公碑陰賛後

碑面題学延陵墓碑陰字類多寶塔忠孝日月詞感
奮頌賛非由臭味合亡国之臣附驥尾有脚東海不
枉蹋包胥淚益和墨汁扶桑万紙空傳搨回頭緬甸

猶

落日紫應羨芳山延五紀胜勝能昏張瑞圖曾碑生

祠媚閹奴

澡泉餘章 二丁

九月四日重謁楠中將墓十韻　齊藤拙堂

南柯兆聖夢乃獲巨川材（楠中內五惇曰楠公墓一題洵為合作）西

惇

日暫沈没東隅忽挽回君王志俄滿彼婦口方咿阿

犖圖叛逆扶蘇蒙忌猜（松陰曰門犖扶蘇用典的切）鳥纔啄魚斃

帛更進狼來碧血濺無處丹心死未灰（旭莊曰精緻）七生

身欲百數恢掃凶埃三世志如一貽謀殲賊魁綱常

長有植忠孝衆相推墮淚碑猶在行人為低徊（松陰曰通

葡正二堂〇弘菴曰長律道勁無一一懈筆非冒腹

筍老文章者不能也）致服碧血丹心一一

聯

聯尤鬼警拔

讀史雜詠卷下　八丁

贈左中將楠公正成　青山鐵槍

公首唱大義以孤城當賊衝中與之業以公之功為第一云

三帝狩窮島四海同傷悲天道有報復恢濟寧無期
歲周一甲子公實生皇畿狂猘藉積威驅使禹甫貔
腥氣遍寰宇黼坐知何移南木入帝夢伯仲見皐伊
行間受付託獨立不敢疑立談定大策畫地期平夷
苟若臣而在不必勞聖懷一呼唱大義隻手支傾頹
英豪爭踴躍趨走供驅馳鯨鯢終一掃忽使氛霧披

偉哉公一言燭照伴著龜微公濟世策誰仰大陽輝
奉盈古有規奈何安忘危酖毒実自招王途奈崎嶇
大福不再来痛悔犹莫追国論況同邇臣策亦安施
小人多用矣夙已見神著偏安亦天意萬古付長嘻
先公將相資隔代是同儕宿昔感公忠曾表一片碑
微臣懐趨謁匏繫拜無期感慨賦此篇空望天一涯

明治十八年九月廿九日寫

楠公碑本跋

神山鳳陽 名述

自有生民忠義節烈出類拔萃者獨楠中將其人也
黄門義公嘗立碑其戰歿之地題八字又以明人朱
則之瑜文刻其陰以表精忠矣嗚呼君而不獲若士者
不幸也臣而不学若士則不忠也抑後之為君者求
而未獲耶後之為臣者学而未至耶明治壬申夏五
月念五日草莽書生神山述肅拜識于碑本之後

報恩錄　天保十一年十月朔之条　　齋藤竹堂

湊河沙土乾淤無涓水天抵中國至畿甸河高於平地常眈無水雨則溢皆然河北田間有楠廷尉墓甚地湮没二百年水府義公始立石表之然貝原篤信嘗過泄地欲建一碑自恐僭分而止作文記之則事亦未成実在義公前尤可尚矣初余未識墓地途問一農夫曰楠氏墓安在農夫作色曰嘻子無禮何不称楠公也余為之慙汗因歎公德入人之深也下略

南朝忠臣往来附首

楠正成墓

摂州矢田部郡湊川二丁計北坂本村ノ田圃ノ中ニアリ、初ハ一堆ノ塚ノミニシテ、冢上ニ松梅ノ二木ヲシルシトス、元禄四年水戸黄門光国卿石碑ヲコヽニ運送シ、一夜ニ建ラル、又石碑ノ外ニ瓦葺方三間ノ両露覆アリ、其頃ノ領主青山播摩守矣ノ造立ナリ、街道ノ傍ニ標石アリ、楠公ノ墓ト銘ス碑石竪三尺九寸横一尺六寸厚サ一尺青石ナリ中坦竪二尺五寸横五尺下坦竪五尺横一丈共ニ白石ナリ亀趺前ニ向ヘリ、碑面ハ嗚呼忠臣楠子之墓光国卿親筆ノ八分字也、碑陰ハ明遺臣朱舜水撰碑文、塔中石棺ニ圓鏡一面ヲ蔵ハ文ニ

日ノ楠正成霊源光圀造立

日本外史正誤巻二　五十九丁

栗原信充

題曰嗚呼忠臣楠氏之墓

外史ニ楠氏ニ作ル然レトモ碑ニハ楠子トアリ楠卿ハ南朝ニテ正三位左近衛中将ナリコレヲ立シ人ハ楠卿薨後三百五十六年外史ニ百餘年ト云ハ妄言ナリニ當ル從三位ノ人ナリ何ヲ以テ正三位ノ人ヲ楠子ト云シヤ子ノ字ハ男子ノ通称ナレモ我邦ニテハ用ヰシ例ナシ嗚呼忠臣ト君上ノ臣下ヲ嗟スル詞ナリ正三位左近衛中将橘朝臣卿之墓ト有タラバ百世ノ後難ナカルベキニ僅ニ八字

ナレバ楠卿ヲ禮スルト云シカ将楠卿ヲ辱シムルト云シカ公式令ヲ読タラバ此ノ如ク無誓ノ「ハ有マジキニ令ノ学講セラレザル故ニ此無禮ノ碑字ヲ後世ニ傳ヘシナリ有士後世ニ「ヲ改ムル者アラバ楠卿ノ霊微笑シ玉ハンノミ外史嗚呼忠臣ノ四字ニ因テ栄辱アルコトヲ辨セズ惜ムベシ又河内国河内郡六萬寺村岩瀧山往生院ニ楠公ノ塔アリ銘ニ従五位上橘朝臣忠成霊光寺大圓義懿大居士於摂州兵庫湊川戦死トアリ又錦部郡観心寺ニ楠公ノ首塚アリ尊氏ヨリ贈シ首級ヲ正行朝臣中院瀧覚ニ命ジテ埋葬セシ所ト云東西八尺五寸南北九尺五寸高サ五尺ノ石柵アリ山陽此事ヲ知ラザルニヤ

太政官日誌第十二　一丁

四月廿一日神祇局并兵庫裁判所ヘ御沙汰之

写

大政更始之折柄表忠ノ感典被為行天下ノ忠臣孝子ヲ勸奬被遊候ニ付テハ楠贈正三位中將正成精忠節義其功烈萬世ニ輝キ真ニ千歳ノ一人臣子ノ亀鑑ニ候改今般神号ヲ追謚シ社壇造営被遊度思食ニ候依之金千兩御寄附被為在候事

但正行以下一族ノ者等鞠躬盈力其功勞不少段追賞被遊合祀可有之旨被仰出候事

別帝ノ通楠社造営被仰出候ニ付テハ天下有志
ノ者御手傳致度儀申出候ヘハ御差許ニ相成候
間於其地程能可取計様被仰出候事

四月

（慶應四年　即明治元年）

湊川神社石華表文

右表

明治四年辛未十月角能三日

左表

以鎮祠基因献石柱聊表寸誠

左背

明治五年壬申春正月

右背

陣幕久五郎通高謹建

同所碑

表

忠節紀念之碑 篆書

背

明治十五年歳次壬午夏

左側

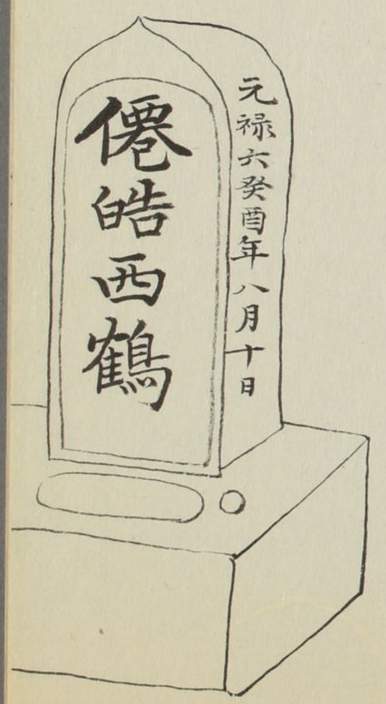
陸軍大將兼左大臣議定官二品大勲位熾仁親王

書

明治十九年九月廿日写

西鶴ノ墓ハ大坂八丁目寺町誓願寺本堂西の裏手南向あり

三側月中程 七月晦日 盧橘同道ふく古墓を尋ぬるならば西鶴の墓を渇す 寺僧もこれを知らざりし 樒よりり 花筒ハ花あり 寺の男ハ何者ゾ手向ゝ問ふ 無縁の墓ハ寺ハ折ゝ花を立て呉ふ



棹石高サ二尺余横

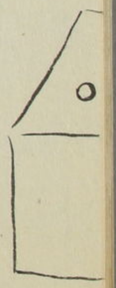
一尺巾石高サ七八寸

大字摠高サ二尺八九寸

右ノウキ下山鶴平北岳團水建

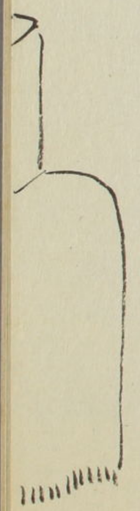
團水ハ西鶴ガ信友ナリ西鶴没ス〜ク後團水京ヨリ来リ七年其旧庵ヲトヽノヘリ甚タ西鶴名残之友トイフ草帚ヨ見ヘシ

追考難波雀ニ曰ク西鶴ハ井原氏庵ハ鎗屋町ニアリ



覊旅漫録巻四

こゝはや三勝の墓ハ大坂難波新地法善寺金毘羅のさとなく茶店のむかふにあり此寺を千日寺といふ三勝ガ家ハもと傘屋今ハ中長町中ほど東側ニあり難波人の説ニこゝは屋ハ舞子の店ナリ（見世ハ江戸ニテ店ト云ガ如シ）うちは傘屋ナリ故ニみのやハ又ハさやハいふナリ

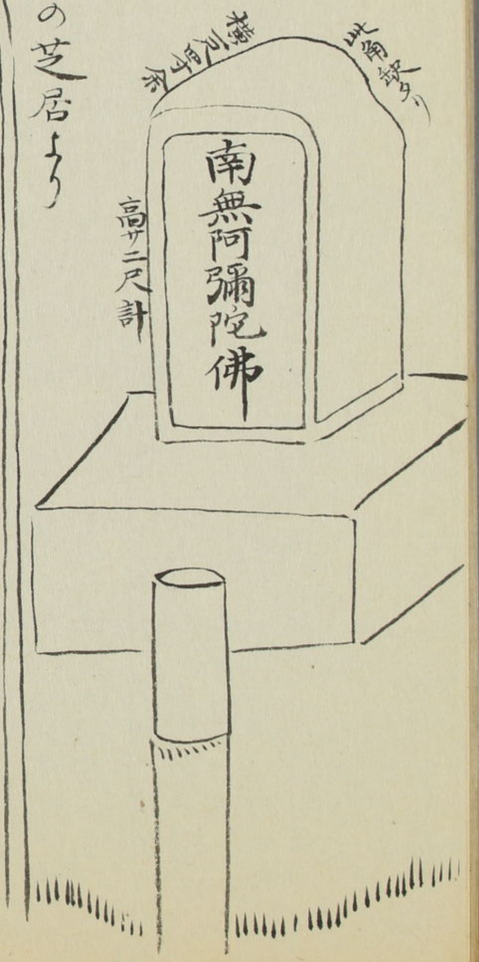


傘屋三勝別人ニあらず

法善寺
三勝墓

百回忌の塔

婆ハ道頓堀の芝居より



寛政十三辛酉三月 みのや三勝 茜屋半七 為百回忌追善也

是を建しとゝもにべくやゆゝの役芝居ゆく常丹狂言ゝ
ゝゝのゝ必芝居より追善とゝ

摂津名所図会

従二位家隆卿墓碣銘并序

夫和歌者王者之徳也国風之始也通于三才乎六義託始於雲盍八雲神詠祖宗於人丸赤人二仙自尓而後其道英傑亟不乏人出其類拔其萃不羣之思飄逸之詞獨步古今者其惟公乎公姓藤原諱家隆歴事七朝叙従二位累官至宮内卿其先出于閑院左僕射冬嗣公祖考猫間黄門清隆卿賜采壬生遠公相踵食邑故号壬生二位考権中納言太宰権帥光隆卿妣太皇太后宮権亮実兼朝臣女公受業蓮游大夫入道釋阿門執弟子禮毎就尋譯和哥

奥旨然直訪古意不必究細故俊成每歎曰不意後
生能至於斯也其將以和哥鳴乎可謂亦未哥仙矣
元久二年春三月勅撰新古今和哥集五輩俊彦允
齊喜選公居其一數遇後鳥羽上皇眷注既名共定
誤
家杭衡貞永元年冬定家卿奉旨奏新勅撰集集中
采摭家隆卿和哥最多當時以為栄上皇頗政叟暇
共摂政良経公論国風叟公奏請家隆末代人麻呂
也上欲学此道宜師其風躰爲繇是賢声高蜚鴻業
日漸西行上人自詠三十六番和哥是日御裳濯川
宮川哥合請俊成定家判之縹緗修飾每自随身一

日舊来授公曰精微之蘊盈在斯書圓位往生自期
在瀬後生頌歌如公可得耶我有所思謹以奉遺也
疾
名
奏殿僧正行意病篤假寐忽夢詣志賀山毗沙門見
一神人呼行意者唱一首歌琅誦之声感温心身驚
覚病乃愈其歌公建保年中九月十三夜侍内宴所
詠河月歌也其妙通鬼神如此矣嘉禎二年冬十二
月嬰病罷官落髪自称曰佛性年七十有九浪速荒
陵北擇不食地謝絶人縁遁迹閑邃游心樂邦三年
夏四月九日自詠七首和歌蓋取諸罪悔之意詰旦
澡浴更衣住日想観酉刻端坐合掌如睹真身迎接

安祥而逝報齡八十歲留葬其居植以松標歲寒心
使人永懷勿翦去今世四百有歲遺址猶存然而荊
棘之所穢鞠為樵豎之區近日詞客莅翔慕德音欲
予勒堅珉以文設節祭以餟俾後勿廢而乞辭於余嗚
呼予之不敏豈能昌紀公之德哉不得已遂銘其詞
曰休矣先達含萃躰玄詞花言兼一取哥仙元久奉
勅撰集慎微芳蘭吐英明錦脫機上嘉其忠電賚非
一附鳳攀竜鴻猷贊隲往古百代作者孔多迄今有
丘聞其能幾何荒陵之北君子所憩非堂無穢可為流
喪涕其身既沒斯文永泯咨公之績万世弥彰

時享保第六龍集重光赤奮若秋九月下澣東寺撫
校法務東大寺別當兼花嚴宗長吏安井門主大僧
正道恕撰拜書

羇旅漫録　澁澤馬琴享和二年紀行　巻四

一　高野山の碑　大坂新清水の町より四里時子
[illegible]　高野山　[illegible]　松[illegible]　[illegible]年　安井[illegible]
門を建る所　[illegible]　[illegible]　新清水の下より銅面多柳
の碑　[illegible]　[illegible]　[illegible]千四百[illegible]　[illegible]門人[illegible]建　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

大阪繁昌詩後編卷中　八丁

秋野坊在西門北。称公文所三綱職。為小野妹子大臣之苗裔。中有太子堂。彼勝鬘院神宮寺家隆塚在愛染堂後。享保年安井門跡撰碑文。秋野坊法印建之。乃在塚側。皆在近。

根津名所図会

芭蕉翁墓誌

香月牛山

桃青子姓松尾字甚蔵號芭蕉翁産于伊賀官于伊勢卒于難波其顛末載于野坡子之碑文故不贅焉余嘗覩世間九流百家称師呼弟者生前懐其德者最多及身歿也報其恩者甚少何乎蓋学其道而未得則不遠千里未待事左右而仰望其德是有所求于彼也既得之則棄之如辮髦以恥称師況乎報其恩耶夫俳諧者和哥之一躰也嗜之者称之道而擇之師者不亦宜乎翁素嗜此道壯而致仕遂離郷而到両都及難波所之處門人弟子營室廬致衣食以

給爲而其性洒落四辟而立所寓無穾黔之地其動
靜語默必於諧可謂此道之盟主滑稽之巨擘也嘗
謂弟子曰俳諧者和哥之一躰也古哲所謂和哥無
師伸己之性情而吟咏爲而天下之口非一世共皆
相変矣以故格調爪自異猶和哥於古今唐詩於盛
晩然唯頑結遯道如何耳賴翁得此道解其惑者億
萬翁然而化矣蓋関西東嗜此道者悉莫不爲之歸
壹是皆称其流亜就中野坡子傑然継其緒以倡此
道于四方當翁之七回諱辰遠来西肥紀史其門人
而建碑于長岑于自裁碑文復當十七回忌之歴来

建疑逢誤欲或逮誤欲 巧疑功誤

筑紫共其弟子相謀而建碑于筥岑今茲来赤間関
劵防長以東迄難波諸州門生而雕刻石碑建于天
王寺裏某所其他翁之墓散在諸州者一在江之義
仲寺一在東都深川長慶寺其在洛之雙林寺者翁
之門人支考所建云今野坡子所建者蓋難波翁之
所卒地也是欲傳師德乎久遠而不朽謝師恩乎當
已以不諠也一日野坡子扣余門来告曰我既老矣
建翁之五十回忌爪不可知故有此挙今年実翁之
讌丘四十一年云乞碑文余曰吾子之巧其勤哉余
雖不敏不敢辞嘉奬其欲讌師恩之志為誌云享保

十九甲寅兎月日前豊倉藩医官八十翁牛山香月
啟益誌

黒川真道蔵書